

〈巻頭言〉卒業生・修了生とのネットワーク構築 … 1	第7回 交錯する北東アジアアイデンティティの諸相研究会の報告… 4
東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センターとの学術交流協定の締結 2	新規科研費プロジェクト紹介 … 5
第1回 市民研究員定例研究会 … 3	NEARセンター研究員の研究活動⑧ … 5
合同研究会「日本の華僑華人社会にみる『台湾』 —北東アジアにおけるアイデンティティの一側面」の開催 … 3	NEARセンター短信 … 6

## 卒業生・修了生とのネットワーク構築

NEARセンター長 井上 治

7月2日に、私が代表を務める研究プロジェクトの会合に、本学大学院北東アジア研究科で修士号を取得し、帰国後に上海で旅行会社を立ち上げた賀志明さんをお招きした。何号か前の巻頭言に書いたが、昨年の秋、上海で調査を行ったときに、賀さん、張紹鐸さん、隋佳傑さんにお目にかかった。このときに上海在住の三人の本学大学院修了者と語らったのは、浜田の観光資源とその魅力についてであったので、そう遠くない将来、旅行者である賀さんがこちらに来る機会ができるのではないか、と思った。

くだんのプロジェクトは、ビザ発給条件の緩和により増加することが見込まれる中国人観光客にとって、石見はどのような魅力をもつ地域であるかという問題意識をもって地域資源を見つめ直し、中国人観光客向け石見観光プランの青写真を描こうという目的をもつものである。そもそもは、昨年度終了した浜田市からの委託研究事業に携わる間、地域振興に積極的な浜田在住の学外の方に、地域と北東アジアを結びつけることができるような課題があったら声をかけてほしい、もしもプロジェクト化できるような内容なら、自分が代表になって学内の資金を獲得することができるかも知れないから、と声をかけて歩いたことにある。声をかけた甲斐あって、市内で米の生産販売を営む傍ら、食に着眼した地域興しに積極的に取り組んでいる高橋功一・晴美さんご夫妻が上述のような課題を示してくれた。島根県職員、地元の銀行員や地元新聞社員の方をメンバーに誘ってなくても

いた。賀さんにお目にかかってから二か月も経たないうちの瓢箪から駒のような偶然であった。

幸いなことに、学内からもこの課題への参加者を得て、計画書を作成し、予定通り大学から資金を獲得できた。上海万博開催中の忙しい中の賀さんとの連絡調整はやや時間を要したが、何とか浜田に来てもらえることができた。賀さんが、現在の中国人が国内観光に示している嗜好を踏まえた上で、浜田側メンバーがあまり気をつけていなかった地域資源の可能性を指摘してくれたこともあり、浜田側メンバー一同、お越しいただいた甲斐があったと大いに喜んだ。

規模の小さな地方公立大学である本学を巣立つ卒業生・修了生はそれほど多くないだけに、彼ら／彼女らひとりひとりが貴重な財産とでもいべき存在である。とりわけ、今回の賀さんや、昨年秋の調査を大いに助けてくれた張紹鐸さんのように、海外から本学の研究・教育・社会貢献活動に直接関与してくれる存在はきわめて貴重である。本学で学び海外へ巣立っていった卒業生・修了生の中には、本学のみならず、浜田や石見の人と土地に特別な思いを抱いている人がいる。北東アジアにいる本学の卒業生・修了生と地元とを結ぶ取組はまだ初歩的な域にとどまっているが、卒業生・修了生とのネットワークを実質化するためのひとつの方策として、このような取組は高い意義を持っている。

## 東北大学東北アジア研究センター、 富山大学極東地域研究センターとの 学術交流協定の締結

今年度は、島根県立大学の法人化以来NEARセンターが取り組んできた研究、教育、地域社会貢献にかかわる事業を全面的に見直す。これを通じて、センターの中心的事業である北東アジア地域に関する研究に重心を移すための準備にあたりたい。

NEARセンターにとって、具体的研究成果を期待できる国内研究機関との連携は宿願であった。幸いなことに、昨年度以来、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センターとの間で学術的交流に関する協議を進めてきた。その結果、5月28日に東北アジア研究センターの佐藤源之センター長と岡洋樹副センター長を、7月9日に極東地域研究センターの今村弘子センター長を相次いで本学にお迎えし、学術交流に関する協定を締結した。いずれの協定とも、両センター間の協力と研究交流を推進することを目的とし、研究者の交流、両組織の関心のある分野での学術資料・刊行物の交換、共同研究・セミナー・シンポジウムの実施、その他の両組織の合意に基づく企画等に積極的に取り組むことを内容としている。

極東地域研究センター、東北アジア研究センターはそれぞれ、NEARセンターが得手としていない学問領域において特色ある研究を推進している。協定締結により、三つの研究機関が研究交流を深めるための枠組みができあがった。今後は、共同で取り組むことのできる現実的で具体的な研究課題の設定と研究組織づくりに着手してゆく。

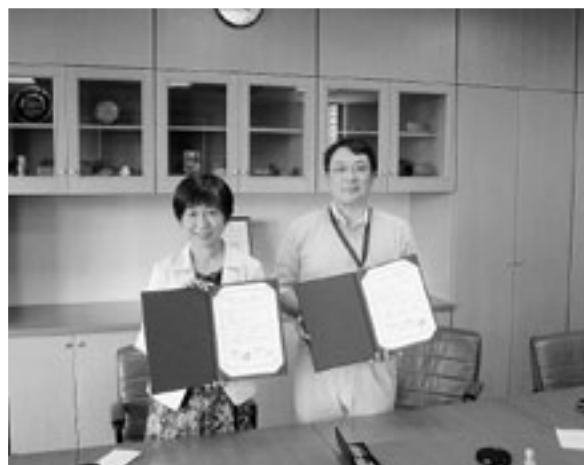
(センター長 井上 治)



(左)佐藤源之・東北大学東北アジア研究センター長  
(右)井上 治・本学NEARセンター長



東北大学東北アジア研究センターとの協定締結後の  
NEARセンター職員との記念撮影



(左) 今村弘子・富山大学極東地域研究センター長  
(右) 井上 治・本学NEARセンター長



富山大学極東地域研究センターとの協定締結後の  
NEARセンター職員との記念撮影

## 第1回 市民研究員定例研究会

2010年6月12日（土）に、本学交流センター・コンベンションホールにて今年度最初の市民研究員定例研究会が開催された。本学NEARセンターにて市民研究員制度を開始して5年目になるが、今年度は、継続・新規をあわせて、これまでで最多の44名もの方々が市民研究員に登録いただき、この第1回定例研究会には27名のご参加を得ることができた。大学院生15名、助手4名、事務局1名、センター研究員5名のほか、本学地域連携推進センターからも林秀司副センター長に会場いただいた。盛況な会合で本年度のスタートを切ることができ、ご来場いただいた方々に心より感謝申し上げます。

はじめに井上治センター長よりあいさつがあり、そのなかでは、市民研究員制度の新たな展開として「市民研究員アドバイザー」という役割を設置し、より自立的な活動をかたちにしていけるように期待したいという話がなされた。アドバイザーにはこれまで市民研究員を継続されてきた方々のなかから5名が選出され、今後、会合を重ねていくことになった。また、今回は第1回の定例研究会ということで、ご参加の市民研究員それぞれからご自身がとりくまれている研究や興味関心のあり方などについて、自己紹介が行われた。こうした自己紹介をうかがっていて感じるの、例年のことであるが、これまで長年の仕事上の経験からのご関心をお話される方もあれば、すでに自分自身のご研究を進めておられる方もあり、問題関心も年齢層もひじょうに幅広い方々が集まってこれているということである。できるかぎり多様な参加や関与のあり方を考えていくことが重要であると思われる。

つづいてNEARセンター研究員の講演会にうつり、「拉致問題と日朝関係」というテーマで福原裕二副センター長からの講演が行われた。「日本人拉致問題」はともすれば情緒的な報道や反応を引き起こしやすいテーマであるが、福原先生は、失踪事件や「疑惑」が「問題」として定位していく経緯を分かりやすく簡略にお話いただき、「拉致

問題」の解決のためにも「体制維持」を求める北朝鮮政権の性格を正確に見極めることの重要性について示唆された。限られた時間であったが、日朝国交正常化に向けた交渉への道筋を丁寧にお話しいただいた。

当日は、大学院生と市民研究員、センター研究員とのフリートークの時間も設定され、それぞれ三々五々情報交換の場を得ていたように思われる。今後の共同研究の企画や市民研究員の方々のご報告が楽しみに感じられる会であった。

（研究員 坂部晶子）



## 合同研究会 「日本の華僑華人社会にみる『台湾』—北東アジアにおけるアイデンティティの側面」の開催

2010年7月16日、「交錯する北東アジアアイデンティティの諸相」研究会は、日本華僑華人学会との共催で、「日本の華僑華人社会にみる『台湾』—北東アジアにおけるアイデンティティの側面」という題で研究会を行った。本ジョイント研究会は華僑華人学会の企画委員会副委員長上水流久彦（県立広島大学）氏と本学の福原裕二のご尽力により実現したものである。

研究会では、上水流氏と李曉東が開会挨拶をしたあとに、まず、何義麟（台北教育大学教授）氏が「戦後在日台湾人における華僑意識の変容」という題で報告を行った。報告では、何氏は「華人」と「華裔」、「台湾華僑」、在日中国人社会、華僑華人社会、などの言葉の間の違いやずれを指摘し、戦後日本社会における在日台湾人が「華僑・華人」として存在してきている「在日台湾人の不可視化」という問題を提起して、その原因について分析した。今後は、日本を含めた世界各地で「台湾」

## 第7回 交錯する北東アジアアイデンティティの 諸相研究会の報告

に基づくアイデンティティや活動が盛んになると予想した。次に、国永美智子（台湾淡江大学亜州研究所）氏が、「台湾から八重山へーパイン工場での労働と定住後の生活ー」という題で報告した。報告は生活史の視点から、八重島のパイン工場で働く台湾から来た女工に対する考察を行った。女工経験者に対するインタビューを通して、「周縁」での「越境」現象からアイデンティティのあり方について論じた。以上の二つの報告に対して、本学の李曉東と坂部晶子がコメントをした。「華僑・華人」という定義と、意識の間のずれという現象から、アイデンティティの多重性、曖昧性の問題が提起され、また、八重島で働く台湾女性を日本や沖縄の間における人々の移動全体のなかで位置づけの必要性、などの問題が指摘された。報告のあと、「東アジアの越境現象にみる台湾の華僑華人」と題するディスカッションがなされた。藤野陽平（日本学術振興会）氏による問題提起のあと、二つの報告と討論を踏まえつつ、研究会の参加者の間で議論が行われた。まず、藤野氏からは、在日台湾人という学術用語設定の意義、アイデンティティの構築主義的な分析、その構築において参照される他者イメージというアプローチが提示された。それを受けて、上述の二つの報告の内容をめぐって、華僑華人研究における「在日台湾人」というアイデンティティの有用性、自己の根源としてのアイデンティティと手段としてのアイデンティティとの関係、そして、マジョリティとマイノリティの権力関係、などの問題を中心に、盛んな議論が交わされた。研究会には、本学の大学院生が多数参加しただけでなく、積極的に発言して討論に加わった。留学生たちの参加により研究会の議論はより充実したものになった。

（研究員 李曉東）



2010年5月27日(木)、本学講義研究棟会議室Bにおいて、第7回交錯する北東アジアアイデンティティの諸相研究会が開催され、福原裕二研究員による「日韓・日朝交流史研究における超域的視角」と題する報告が行われた。同研究員が長年取り組んできた竹島問題を事例として、北東アジアにおける超域研究の可能性について考察した。

まず同研究員は、伝統的な国際政治学を乗り越えて、むしろその近隣関係の発展の上に北東アジアの未来の国際関係の原型を投影する北東アジアの目的を踏まえながら、竹島問題を領有権問題に特化した協議のプロセスで論議されるだけではなく、むしろローカルな視点から地域公共財のあり方の一つとしてこの問題を捉え、実利を調整していく過程でこの問題を解決していくことも必要なのではないかと指摘する。このような視点から竹島問題の問題点を考察し、日韓交渉という外交関係、竹島周辺の漁業補償問題、竹島周辺海域の漁業資源、島根県における竹島問題への取り組みといった論点を整理した。また、このような論点を考察しながら、外交関係においては「同床異夢」的解決が図られ、その歪みが山陰漁業者に重くのしかかっていることも指摘された。

さらに同研究員は、日韓漁業問題に対する民間の取り組みを取り上げる。とくに、2000年以降開催されてきた日韓民間漁業者当事者間協議の事例に注目し、暫定水域の操業秩序の維持、資源管理、交替操業・自粛期間設定、漁船間のトラブル防止への取り組みを紹介し、余り知られていない民間漁業者によるガバナンスの役割を考察した。

最後に、同研究員は、以上の論議を踏まえて、竹島問題をはじめとするいわゆる領土問題に取り組む際、国家間関係だけでなく、むしろそれと並行して形成されつつあるリージョナルな関係性の中で再定位することに注目する。すなわち「発展と共生」という目標の下、国家のニーズだけでなく、社会のニーズに則しながら問題の所在を追求することにより、地域が地域として対処しようとするローカル且つリージョナルな構想が生まれる

ことになるのではないかと指摘する。竹島問題が国家間関係の問題であると共に、日本海をめぐる北東アジアという地域形成の課題でもあることを再認識させる報告となった。

(研究員 江口伸吾)

## 新規科研費プロジェクト紹介 「ロシアにおける労働者－経営者関係と 労働インセンティブ」

本研究の目的は、経済危機からの回復および今後の経済成長の方向性を模索しているロシアにおいて、労働者の企業内での利害関係、労働態度・価値観を実証的に明らかにすることを通して、労働生産性向上にもとづく成長可能性を展望することである。1999年以降のロシア経済の急速な成長は、石油・天然ガスを中心とする資源価格の高騰を背景に、人々の旺盛な消費活動によってもたらされてきた。かつてのような原油価格の高騰が見込めない中で、今後の成長要因として労働生産性の向上に着目せざるを得ない。その際、企業内における労働者の利害関係の解明、労働態度・価値観の分析が不可欠の課題となる。

研究の独自性は、①賃金水準などの量的指標ではなく、労働態度・価値観といった質的指標に注目して、ロシア企業における利害関係を分析する点にある。計量分析では明らかにしえないロシア企業の独自性が浮かび上がると考える。②これまで独立に研究されてきた労働市場分析と労働態度の分析を総合させ、企業内での労働者－経営者関係を明らかにする点である。この背景には、制度形成や経済主体の行動様式の独自性にもとづいて、筆者がロシアを独自の資本主義の型として認識している点が指摘されよう。

3年間の研究期間内に解明したい課題は以下の3点である。①ロシア企業における賃金決定メカニズムの解明、②労働態度・価値観の実証分析、③経営者－労働者関係の理論的把握である。いずれの課題もこれまでの研究では完全に解明されてこなかったものであり、実態調査を中心にロシア人研究協力者の協力のもと課題の解明を目指す。

今年度は先行研究の理論的整理、研究機関でのレビューをおこなうとともに、以下のように

学会での報告を予定している。報告は、「ロシアにおける社会変動と労働者の反応」(比較経済体制学会第50回全国大会、6月6日、於 大阪市立大学)および“Marketization and Reorganization of Lifestyle in Russia”(欧州比較経済学会第11回大会、8月28日、於 エストニア・タルトゥ大学)である。また、12月あるいは2月にロシア(モスクワ)にて研究機関でのレビュー、研究者とのディスカッションを予定している。

(研究員 林 裕明)

## NEARセンター研究員の 研究活動⑧

〈センター研究員の活動をリレー連載で紹介しています。今号は飯田泰三副学長にご執筆いただきました(編集部)〉

あなたの専門は何ですか、と訊かれると、「日本政治思想史」ですと答える。3年前こちらに来るまで、法政大学法学部政治学科で38年間、そういう名前の科目を担当してきた。



しかしこれは「専門」と言えるものだろうか。「政治学」+「哲学」+「歴史学」+「日本学」という、途方もない欲張った名称の科目である。

おそらく、丸山眞男が1952年、戦前の仕事をまとめて『日本政治思想史研究』という題名の著作を刊行したとき、このジャンルが市民権を得た。

じつは私が1971年、法政大学に赴任した年に担当した科目は「政治過程論」で、その次の年に「日本政治思想史」という科目が開設された。(私の前任者の藤田省三が、その4年前、成沢光を迎え入れるとき、自分の担当科目「日本政治史」を彼に譲って「政治過程論」という科目を作り、自分はそちらに移ったのである。)

そのころ、「日本政治思想史」という科目をもった大学はほとんどなかった。丸山眞男自身が東大法学部で担当していたのは「東洋政治思想史」講座であった。(南原繁が東大法学部にその講座を

1927年に作った歴史的由来については、丸山が何度か語っている。

それはともかく、私は丸山眞男という人の学問に惚れ込んだことから研究者生活に入ったのであって、「日本政治思想史」という学問ジャンルを選ぶことから入ったわけではなかった。

私は高校時代、ニーチェやドストエフスキーを耽読することで過ごし、大学は法学部に入ったけれども、依然として関心は(実存主義的な)「哲学」にあって、「政治」にも「歴史」にも「日本」にも一通りの関心以上のものは持てなかった。

ところが、一年生(1961年)の秋、丸山眞男の『日本の思想』が岩波新書で出てすっかりそれに魅了され、それからは丸山眞男の著作を探し出しては片っ端から読み漁った。関心領域が「日本政治思想史」の世界へ一挙に広がったのである。

三年になって丸山の「東洋政治思想史」を聴講した。丸山はちょうど2年間の在外研究を終えて帰ってきたところで、日本思想の「原型」について論じ始め、鎌倉新仏教や鎌倉武士のエートスについて情熱的に講じていた。中でも特に、「原型」(=天皇制的なるもの)を原理的に否定・克服するものとしての「普遍者の自覚」の位相に焦点を合わせ、親鸞の「内面的価値へのコミットメント」に発する『歎異抄』の論理が蓮如の一向一揆の世界を可能にする、というあたりに決定的ともいえる衝撃を受けた。

そうして4年の夏休み前ごろ、周囲が就職活動に眼の色を変えていたころ、何もする気がなくて学校もほとんどサボり、たまたま本郷三丁目の辺を歩いていて同級生の一人(内田富雄。外務省に入り、スウェーデン大使などつとめた)に呼び止められ、「君は学者にでもなるしかないよ。丸山先生に心酔しているのだから、先生に手紙を書いて会いに行きたまえ」というアドバイスを受けた。そこから私の日本政治思想史研究者としての生き方が始まったのだった。

(研究員・本学副学長 飯田泰三)

## NEARセンター短信

### ●受賞

○唐燕霞研究員が、中国黒竜江省ハルピンで開催された中国社会学会2010年全国学術大会(7月24～26日)において、「従単位制到社区制—試論 居委会在社区自治中的作用」と題する報告を行い、同全国学術大会の優秀論文賞を受賞しました。

### ●春学期の調査・報告活動(2010年4月～2010年9月)

#### ○井上 治研究員

- ・島根県立大学にて「産学官連携による石見の中国人向け観光誘致プラン」集会(4月17日)。
- ・東北大学東北アジア研究センター(仙台)、富山大学極東地域研究センター(富山)訪問(5月16～18日)。
- ・島根県立大学にて「産学官連携による石見の中国人向け観光誘致プラン」集会(5月20日)。
- ・京都・大谷大学にて科研(A)「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究—過去の復元から未来への保存へ—」(代表:松川節)集会(5月22日)。
- ・モンゴル・ウランバートルにて白樺文書研究に関する打ち合わせ(5月23～26日)。
- ・島根県立大学にて東北大学東北アジア研究センターと学術交流に関する協定を締結(5月28日)。
- ・新潟市にて市民講座担当(6月3日)。
- ・中国・北京にて中央民族大学との交流協定締結にかんする打ち合わせ(6月4～6日)。
- ・島根県立大学にてNEARカレッジ講師担当(6月15日)。
- ・松江にてNEARカレッジ講師担当(6月16日)。
- ・科研(A)「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究—過去の復元から未来への保存へ—」(代表:松川節)により、ポーランド・クラクフ市、ワルシャワ市にて資料調査(6月18～28日)。
- ・島根県立大学にて「産学官連携による石見の中国人向け観光誘致プラン」集会(7月2日)。
- ・島根県立大学にて富山大学極東地域研究センターと学術交流に関する協定を締結(7月9日)。

- ・浜田にてくにびき学園講師担当（7月13日）。
- ・東京学芸大学にて学長裁量経費によるモゴール語研究会開催（7月16～19日）。
- ・広島にて竹島／独島研究会に参加（7月23日）。

#### ○江口伸吾研究員

- ・笹川日中友好基金「日中関係40年史（1972～2012）」(政治篇)事業への参加・報告（4月17日、7月3日、8月21～22日）。
- ・一橋大学にて開催された日中社会学会第22回大会に参加（6月5～6日）。
- ・中国黒竜江省ハルビンで開催された中国社会学会2010年全国学術大会において、「基層社会主体的多元化与自治的政治社会結構—社団論的視角—」を報告（7月25日）。
- ・成蹊大学アジア太平洋研究センターで開催された共同研究プロジェクト「アイデンティティの創生と多元的世界の構築—アジア・中国の磁場からの研究—」の研究会において、「中国の北東アジア研究に見られる『北東アジア』—北東アジアにおける複層的アイデンティティへの一視角—」を報告（7月31日）。

#### ○坂部晶子研究員

- ・島根県立大学にて、石見中国観光誘致プロジェクトにかかわる会合に参加（4月17日、5月20日、7月2日）。
- ・日本華人華僑華人学会研究会「日本の華僑華人社会にみる『台湾』—北東アジアにおけるアイデンティティの一側面」（島根県立大学開催）にてコメンテーターとして参加（7月16日）。
- ・中国北京、黒竜江省、内蒙古自治区にて、植民地経験と博物館展示にかんする現地調査（8月8日～9月12日）。

#### ○唐燕霞研究員

- ・中国社会学会2010年全国学術大会にて、「従単位制到社区制—試論居委會在社区自治中的作用」と題する報告（7月25日）。
- ・中国武漢にて、旧NEAR財団共同研究プロジェクト『「単位」人から「社区」人へ—中国都市部における「社区」アイデンティティの創出と住民自治のあり方』（代表：唐燕霞）のインタ

ビュー調査の実施（8月24日～8月30日）。

- ・中国（上海・無錫・南京）にて、科研費プロジェクト「中国都市基層社会の自治に関する調査研究」（基盤B・代表：唐燕霞）のインタビュー調査の実施（8月31日～9月10日）。
- ・日本生産性本部にて、「中国事業と労使関係課題」と題する講演（9月15日）。

#### ○林 裕明研究員

- ・京都大学にて比較経済体制研究会例会にて報告「ロシアにおける社会変動と労働者の反応」（5月22日）。
- ・大阪市立大学にて比較経済体制学会第50回全国大会にて報告「ロシアにおける社会変動と労働者の反応」（6月6日）。
- ・北東アジアにおけるアイデンティティの諸相研究会にて報告「ロシア経済研究の視点からみた「北東アジア学」の創成可能性について」（6月24日）。
- ・エストニア・タルトゥ大学にて欧州比較経済学会第11回大会にて報告“Marketization and Reorganization of Lifestyle in Russia”（8月28日）。
- ・英国・バーミンガム大学・ロシア東欧研究センターにて金沢大学・堀林巧教授の科研費共同研究にもとづくJoint Workshopにて報告“Reorganization of Lifestyle and Impact of the Global Economic Crisis in Russia”（9月22日）。
- ・京都大学にて開催された国際シンポジウム“Global Shock Wave: Rethinking Asia's Future in Light of the Worldwide Financial Crisis and Depression 2008-2010”にて第VIセッションのコメンテーター（9月25～26日）。

#### ○福原裕二研究員

- ・山口県公文書館にて、科研に関わる資料収集（6月13日）。
- ・いわみーる（浜田市；くにびき学園）にて、「日韓交流史」を講義（6月15日、7月6日）。
- ・島根県浜田市にて、科研、財団研究助成金に関わるインタビュー調査の実施（6月23日）。
- ・韓国（ソウル）にて、科研・財団研究助成金に関わる調査（8月1日～3日）。

- ・韓国（鬱陵島）にて、阿部志朗市民研究員、森須和男市民研究員とともに、科研・財団研究助成金に関わる調査（8月4日～10日）。
- ・韓国鬱陵島（第1回鬱陵島フォーラム）にて、「鬱陵島近代の初歩的考察」と題する報告（8月6日）。
- ・韓国（ソウル・釜山）にて、科研・財団研究助成金に関わる調査（8月11日～22日）。
- ・韓国ソウル（高麗大学校日本研究センター研究コロキウム）にて、「竹島／独島研究における第三の視角」と題する報告（8月23日）。
- ・韓国（ソウル）にて、科研・財団研究助成金に関わる調査（8月24～25日）。
- ・中国（瀋陽・丹東）にて、脱北者問題、中朝関係、在中朝鮮総連に関する調査（8月26日～30日）。
- ・韓国（鬱陵島）にて、科研・財団研究助成金に関わる調査（9月6日～11日）。

#### ○李曉東研究員

- ・政治思想学会（於東京大学）で「北東アジアの啓蒙思想と『読み換え』—西周を例に」と題するテーマで報告を行った（5月23日）。
- ・島根県立大学で公開講座「『三国志』から読む政治学」を行った（7月21日）。
- ・中国社会学会年会（於ハルビン）「社会转型与社会治理」フォーラムで「論社区自治中的公共性問題」と題するテーマで報告を行った（7月24～25日）。
- ・中国武漢で中国の社区自治に関する調査を行った（8月24～31日）。
- ・中国の上海、無錫、南京各地で中国都市社区の「居民委員会」に関する調査を行った（9月1～10日）。
- ・国際シンポジウム「清末中国社会と日本」（於清華大学）で報告「法政速成科と清末中国」と題する報告を行った（9月11～12日）。
- ・吉林省東北師範大学歴史文化学院で「思想史から見る日本と近代中国」という題で連続講座を行った（9月13～17日）。

#### ○王鳳助手

- ・一橋大学にて、日中社会学会第22回大会に参加し、自由報告の部会で「90年代以降の社会意識

の変化に関する言説の一考察」について報告（6月4日）。

#### ○パールィシェフ・エドワルド助手

- ・九州大学にて開催された第3回トランスボーダー研究会（九州大学）において、「20世紀初頭の国際関係と1916年の日露秘密同盟」を報告（9月18日）。

## NEAR News 第37号

2010年12月発行

### 【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター  
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <http://www.u-shimane.ac.jp/36near/>